

第一章 玉鬘の物語 玉鬘と夕霧との新関係

[第一段 玉鬘、内侍出仕前の不安]

「尚侍の御宮仕へのことを(尚侍の御宮仕えを)、*誰れも誰れもそそのかしたまふも(源氏殿も父大臣も勧めなざるが)、*「たれもたれも」は「そそのかしたまふ」と敬語なので<源殿も藤殿も>ではあるのだろうが、是は女房語りの地文というより、むしろ語感としては<この人もこの人も>という実際に見聞きした本人の談に思える。渋谷校訂文では下の「いかならむ」からを姫の心中文として括弧付けしてあるが、冒頭の「ないしのかみのおんみやづかへのことを」から心中文が始まっている、と読むのは曲解か。私はそう読みたい。

*いかならむ(どうしたものか)。親と思ひきこゆる人の御心だに(親と思ひ申し上げている源氏殿の御心でさえ)、うちとくまじき*世なりければ(好色をお見せになるような、何があるか分からない男女の仲なので)、ましてさやうの*交じらひにつけて(ましてそうした御所勤めをするにつけては)、心よりほかに*便なきこともあらば(帝の御気持ち次第でお手付きとなるような、思いの外に不都合なことにでもなると)、中宮も女御も(義理の姉筋の梅壺中宮も実の妹筋の弘徽殿女御も)、方がたにつけて心おきたまはば(それぞれの立場で私と帝の仲を気掛かりに為されば)、はしたなからむに(始末が悪くて)、わが身はかくはかなきさまにて(私の立場はこのように頼り無い事情で)、いづ方にも深く思ひとどめられたてまつれるほどもなく(養父にも実父にも義姉や実妹ほどに大事に思ひ置かれる訳は無く)、浅きおぼえにて(浅い事情しか知らずに)、ただならず思ひ言ひ(とかく詮索して噂し)、いかで人笑へなるさまに見聞きなさむと(どうにかして私を物笑いの種に見聞きしようと)、*うけひたまふ人びとも多く(妬みなざる他の尚侍候補の人たちも多く)、とかくにつけて(何かに付けて)、やすからぬことのみありぬべきを(気の休まらないことばかりありそうなので)」 *「いかならむ」を受ける結び句は「ありぬべきを」であり、此処に示されるものが尚侍に就くに当たっての姫の内心での考察内容だ。御所勤めでは敵も多く、自分の立場は悪そうだ、という状況分析は冷静で論理的で、この人の優れた資質を思わせる描き方だ。 *「世」は<世の中>という言い方でも意味は損なわれないだろうが、話の要点としては<男女の仲>のことを言っている。 *「まじらひ」は<宮仕え>。 *「びんなきこと」は注に<帝から寵愛を受けること。>とある。 *「うけふ」は「誓ふ」と表記され<祈る、祈願する>または<人を呪う>と古語辞典にある。ただ此処では「呪う」とまで、対の姫が人に恨まれるような記事が前に語られていないので、より一般的に有り勝ちな「妬む」としてみたい。また、「たまふ」の敬語表現からして「人びと」は女房以下とは考え難く、先ずは近江君が思い付くが、複数なので<他の尚侍候補の貴婦人たち>と考えておく。

もの思し知るまじきほどにしあらねば(対の姫は道理の分からない子供ではないので)、さまざまに思ほし乱れ(このように、さまざまにお悩み為さり)、人知れずもの嘆かし(宮仕えにすることについて、一人物思い気味です)。

「さりとて(とはいえ)、かかるありさまも*悪しきことはなけれど(宮仕えせずにこのまま六条院で姫暮らしを続けることも出来ないわけではないが)、この大臣の御心ばへの(源氏殿の好色な御心向きの)、*むつかしく心づきなきも(嫌らしく変態気味なもの)、いかなるついでにかは(こうした宮仕えという生活の変化が無ければ、どういうきっかけで)、もて離れて(断ち切って)、

人の推し量る*べかめる筋を(世間が噂しかねない私が殿の女になっているという話を)、*心きよくもあり果つべき(潔白の主張で貫き通すことが出来るだろうか)。*「あし」は<評価が低い>という価値判断だが、具体的に<都合が悪い>ことを意味する場合もある。そして、此処での話題は姫の価値判断などである筈は無い。従って「悪しきことはなく」は、宮仕えしないことが宮仕えすることより<価値が無いことは無い>という意味ではなく、就職が命令なのではなく勸奨でありその諾否が姫の意思に任されているので<宮仕えしなくても良い>という自分の立場を再確認している言い方だ。しかし、去就が姫の自由意志に任されているというのは形式上のことで、貴婦人だから自主性が尊重されるなどという話でも無く、むしろ姫はその立場の力関係からして気ままに振舞えるはずも無く、実態としては妃候補で有ると同時に司の権威の重しを果たすという尚侍の微妙な立場を本人に自覚させる意味での‘勸奨’に違いない。そして、その自覚が出来るだろうと姫の優れた資質を見込んでの殿方の推奨なのだろう。だから姫は<宮仕えしなくても良い>立場とはいえ、「かかるありさまにて(このままで)」とは言えずに、「かかるありさまも悪しきことはなけれど(このままで居る事も出来るが)」という言い方にならざるを得ない。*「むつかし」は<不快だ、煩わしい>。「心付き無し」は<意に満たない>。ところで、此処の話題の対象は<殿が姫に手を出すこと>だから、それは姫にとって立場上は対処に困ることではあるが、絶対に受け付けない<不快なこと、煩わしいこと>というよりは、地位もあり容姿も教養も豊かな殿を心身ともに拒否できない<難しさ→いやらしさ>が有る事であり、対外的に姫は殿の娘ということに成っているにも関わらず、その姫の所に忍び通うという外形的に<父娘姦淫>に見えてしまう殿の所業は<意に満たない>と言うよりは<話の筋が悪い→変態のようだ>と言うことなのだろう。*「べかめる」は「べし」の連用形+「めり」の連体形。「べし」は動詞・形容詞などの終止形に付いて、その活用語の<可能性、妥当性>を示す助動詞。「推し量るべし」は<推し量ることが出来る>。「めり」は<みたいな>みたいな婉曲・曖昧表現の助動詞。「推し量るべかめり」は<推し量ることが出来るような>だが、「めり」は<話者にとっては自身の見聞から確定的な事柄を、その事の評価を下すことを避けるために事柄自体が不確実であるかのように言い繕う言い方>のようで、つまり話者にとって、肉体関係があった、または有ったとしか思えない殿と姫の間柄を、事此処に至っても表向きはその断定は避けるという姿勢で語る、という頑なな文らしい。孕まずに別れてしまえば、今だって刑事事件でも無い限り、第三者が姦通の有無を調べるなど出来ないし、増して当時なら調べても客観的物証を挙げる事が出来ずに、当事者以外にその関係は結局分からない。*「こころきよし」は<心に曇りが無い、心に邪念が無い、心が美しい>という場合もあるだろうが、<心は潔白だが体は泥に塗れている>と見えなくも無い。そして「心清くも」の「も」は対象範囲を限定する助詞だから<心(こそは、だけは)清くあるものとして→(事実とはともかく)潔白を主張して>となり、「あり果つ」が<その状態で在り通す>となる。しかし実際は、殿と姫は愛人関係にあった。公然とそれが分かる露骨な朝帰りこそ控えたものの、殿は姫の部屋に通い詰めに入り浸りで、二人きりの時間を多く過ごした。そういう場面はいくつも語られているのに、作者は決定的な情交描写を避け、言葉としては愛人関係を明言せずに、表向きは父娘関係を今でも保持している。逆に言えば、はっきりと否定しないことが愛人関係にあったことの証明のようなものだが、これほど微妙な言い回しをしてまで、表向きは二人の肉体関係の有無は断定できない、という含みを決して潰さない、という確たる編集方針に基づいて注意深く計算された語り口だ。

まことの父大臣も(実父の藤原大臣も)、*この殿の思さむところ(こちらの源氏殿のお考えに)、憚りたまひて(遠慮なさって)、うけばりてとり放ち(表立って姫を娘として引き取り)、けざやぎたまふべきことにもあらねば(世間にはっきりと親子関係を御示しなさることも無いので)、なほ*とてもかくても(この先出仕してもしなくても)、*見苦しう(日陰の女で肩身が狭く)、*かけかけしきありさまにて(好色がらみの人間関係に)、心を悩まし(苦しい立場に立たされて)、人にもて騒がるべき身なめり(人から噂される運命のようだ) *「この殿の思さむところ」は表面上で言えば、

藤原殿に実の親子の血筋という姫の出自を明かしたが、源氏殿はその後も養父の立場を放棄せず、自らが姫の後見者として面倒を見ていくという意向、なのだろう。藤原殿には、その協力をして欲しいという立場で、あくまで主導権は自分が執る、という源氏殿の姿勢のようだ。*「とてもかくても」は注に<尚侍として出仕してもまたこのまま六条院にいても、の意。>とある。*「みぐるし」の中身は源氏殿の女になっても、帝のお手付きになっても、正妻の地位には着けない日陰の女、ということだろう。*「かけかけし」は<気掛かりが多い>の他に<好色がましい<懸想めいた>と古語辞典にある。

と、なかなかこの親尋ねきこえたまひて後は(かえって実の親に引き合わせなされた後は)、ことに憚りたまふけしきもなき大臣の君の御もてなしを取り加へつつ(ご自分は養父の立場なので、親子関係の血筋を特に遠慮することも無い源氏殿の好色めいた御態度を姫は徐々に強く受け取って)、人知れずなむ嘆かしかりける(一人憂鬱気味なのでした)。

思ふことを(悩み事を)、まほならずとも(丸ごとでなくても)、片端にてもうちかすめつべき女親もおはせず(一部だけでも打明けられる女親もいらっしゃらず)、*いづ方もいづ方も(東の夫人も南の夫人も)、いと恥づかしげに(恐縮するほど、とても立派でいらして)、いと*うるはしき御さまどもには(気安くは近付き難い御関係なので)、*何ごとをかは(折り入って)、さなむ(あだとか)、かくなむとも聞こえ分きたまはむ(こうだとかご相談できなされません)。*「いづ方もいづ方も」は与謝野訳文に<東の夫人にせよ、南の夫人にせよ>とあり、「女親もおはせず」に続く文意としては分かり易い読み方なので、従う。*「うるはし」は<端然として近づき難い>。*「何ごとをかは」は注に<「聞こえ分きたまはむ」に係る。反語表現。>とある。「聞こえ分く」は<説明申し上げる、相談申し上げる>で、「たまはむ」は姫を主語とした敬語表現。

世の人に似ぬ身のありさまを(普通の人とは違う自分の身の上を)、うち眺めつつ(物思いに耽りながら)、夕暮の空のあはれげなるけしきを(夕暮れの誰そ彼のような頼り無い空の薄暗くなってゆく様子を)、端近うて見出だしたまへるさま(窓辺で眺めていらっしゃる姫の姿は)、いとをかし(とても情緒があります)。

[第二段 夕霧、源氏の使者として玉鬘を訪問]

*薄き鈍色の御衣(うすきにびいろのおんぞ、薄青ねず色の喪服で)、なつかしきほどにやつれて(故大宮を偲ぶように力落とした風情で)、例に変はりたる*色あひにしも(いつもとは違った雰囲気なのが却って)、容貌はいとはなやかにもてはやされておはするを(顔立ちが一段と引き立って見えなざる対の姫君を)、御前なる人びとは(部屋付きの女房たちが)、うち笑みて見たてまつるに(良い器量だと嬉しく拝し申し上げるところに)、宰相中将(参議に昇進した源中将が)、同じ色の(同じ青ねず色の)、*今すこしまやかなる直衣姿にて(少しだけ濃い目の略礼服で)、*纓(えい、冠の垂れ飾り尾布を)巻きたまへる姿*しも(巻き上げていらっしゃる武官らしい姿というのが)、またいとなまめかしくきよらにておはしたり(また一段と艶っぽく改まった姿でお見えになりました)。*「薄き鈍色の御衣」は注に<大宮の服喪のため。後の「藤裏葉」巻に、三月二十日に薨去したことが語られている。>とある。脱稿が強く疑われる。というか、もし脱稿が無いとしたら、こんな重要な記事を省略する作者の神経を疑う。大宮から見て葵上腹の源中将や内大臣家の子たちは血筋の繋がった孫だ。しかし、葵上の外腹の源氏の子である明石姫や対の姫は孫筋ではあるが、よほどの縁で小さい時から面倒を見たとかの事情が無い

限り、実際は孫とは認識しない。そのほぼ他人と思っていた対の姫が実は内大臣の子であった、ということは、大宮にとっても急に孫が出来たような慶事だったのだろう。大宮の内心描写は無かったので、その機微までは窺えないが、弱った体で自筆の祝い状を寄越したのだから、幾分かの高揚感があったと思う。裳着は二月十六日だったので、三月二十日に亡くなったとしたら、ぎりぎり間に合ったという段取りだ。源氏の不都合を目立たせない方法は、大宮が内大臣との仲を取り持つ以外にも有るのかも知れないが、大宮の仲介がその有効な方法の一つであったことは間違い無い。そういうギリギリ感だから、大宮の消息は物語上で大きな意味を持つはずだ。その記事の省略はありえないし、実際にこの行き成りの喪服姿に戸惑うし、非常に強く違和感を覚えるし、普通に読み進む上でも物事の動向を理解しにくい。 *「いろあひ」は<装束一式の取り合わせ>で、それが表す<雰囲気>。「しも」は通常予想される状態や形態よりも、実際は必ずしも悪くは(又は、良くは)無く、という意味を表す副詞で、予想に反して(却って)云々という聞き手の注意を喚起する言い方だ。 *「今すこしこまやかなる直衣姿」については、注に<『完訳』は「母方の祖母の死は服喪三か月。その期間が過ぎたのに父方の玉鬘(服喪期間五か月)より濃い喪服を着用。『集成』は「夕霧には外祖母の喪であるが、最近まで親しく養育されていたので、普通よりも濃い色を着ている」と注す。>とある。 *この「しも」は体言に付いているので、その体言概念の一般的水準以上に、普通以上に、という強調語感。 *「纓巻きたまへる姿」は「巻纓(けんえい)」という武官姿、とのこと。

初めより(初めから)、ものまめやかに心寄せきこえたまへば(中将は弟として姫に誠実に親切に接しなさっていたので)、もて離れて疎々しきさまには(姫も中将を遠ざけて他人行儀には)、もてなしたまはざりしならひに(応対なさってこなかった慣れから)、今(今になって)、あらざりけり(姉弟ではなかったからといって)、こよなく変はらむもうたてあれば(急に態度を変えるのも浅ましいので)、なほ御簾に几帳添へたる御対面は(今でも御簾越しに几帳で隔てた御対面は)、人伝てならでありけり(取り次ぎ無しの直答でした)。殿の*御消息にて(殿の御使者として)、内裏より仰せ言あるさま(主上から姫に尚侍として出仕せよという御沙汰があった旨を)、やがてこの君のうけたまはりたまへるなりけり(そのままこの中将君が姫君にお伝えするお遣いを仰せ遣い為さったのです)。 *「せうそこ」は<手紙>であり、それで知らさせる事物の<様子>でもあるが、古語では<他家を訪れて、来意を告げ、案内をこうこと。>とも大辞泉にある。その者を使用する主人からすれば<使い走り>だが、迎える者にとっては<代理の使者>だ。

御返り(姫のお返事は)、おほどかなるものから(おっとりとした調子ながら)、いと*めやすく聞こえなしたまふけはひの(筋道立ててお答えなさる様子の)、*らうらうじくなつかしきにつけても(利発そうで心引かれるに付けても)、かの野分のあしたの御朝顔は(あの嵐が過ぎた日の朝の殿と睦まじく為さっていた姫の御姿が)、心にかかりて恋しきを(気になって二人の仲の真相が知りたくて)、うたてある筋に思ひし(父娘らしくもないと懸念したが)、聞き明らめて後は(姫が藤原姫との出自を聞き知った後は)、なほも*あらぬ心地添ひて(中将自身も姫を恋しく思い始めて)、 *「めやすし」は<見苦しくない、感じがよい>と一般的な形容詞として古語辞典に説明されているが、「目安」が<付き易い>という語感だから、話が分かり易い、筋道が通っている、くらいには言えそうだ。 *「らうらうじ」は「勞勞じ」と表記され<物慣れている。物事に巧みである。>また<才たけて情感が豊かである。>また<上品で美しい。>と大辞泉に説明されている。文意から<才たけて→利発で>としたい。 *「あらぬ心地(変な気持ち)」という言い方は、以前にあった<自分は二の姫と恋仲なのだから他の女への浮気はいけない>と中将がこの姫への思いを断ち切ろうとした記事、を受けているのだろう。父親の女だから遠慮する、という発想は無いようだ。

「この宮仕ひを(殿は姫のこの宮仕えを)、*おほかたにしも*思し放たじかし(娘を社交界に送り出す普通の親心のようにには割り切っていないだろう)。*さばかり見所ある*御あはひどもにて(あの嵐の朝のように優れた風情の御二人同士なので)、をかしきさまなることのわづらはしき(色恋沙汰になることで面倒な人間関係が)、はた(やはりどうしても)、かならず出で来なむかし(必ず起きてしまうだろう)」 *「おほかたに」は形容動詞「大方なり(普通の様子)」の連用形。「し」は強調の副助詞。「も」は焦点を絞る係助詞。 *「おもひはなつ」は<諦める、思い切る、割り切る>。「おぼす」の敬語表現と文意から主語は源氏殿。 *「さばかり」は「かの野分のあしたの御朝顔」のこと、に違いない。 *「おんあはい」は<殿と姫との間柄、取り合わせ>。

と思ふに(と思うと)、ただならず(落ち着かず)、胸ふたがる心地すれど(胸が塞がる気がしたが)、つれなくすくよかにて(素知らぬ顔で真面目ぶって)、

「人に聞かすまじとはべりつることを聞こえさせむに(他の者に聞かせるなど御座いました話を申し上げたく思いますが)、いかがはべるべき(よろしいでしょうか)」

とけしき立てば(と意味ありげに言うと)、近くさぶらふ人も(姫のお側近くに控えていた女房たちも)、すこし退きつつ(少し離れて下がっては)、御几帳のうしろなどに*そばみあへり(衝立の後ろなどに寄り合っていました)。 *「そば」は<側面、ふちの方>とあり、「そばむ」は<隅に)片寄る、偏る>と古語辞典にある。

[第三段 夕霧、玉鬘に言い寄る]

そら消息をつきづきしくとり続けて(中將は姫に殿からの伝言としてそれらしい嘘を吐き続けて)、こまやかに聞こえたまふ(宮仕えするに当たっての細々とした注意点などを申しなさいます)。主上の御けしきのただならぬ筋を(帝の御期待が相当高いことを)、さる御心したまへ(自覚なさっておくように)、などやうの筋なり(などといった話です)。いらへたまはむ言もなく(姫はお答えをなさる言葉も無くて)、ただうち嘆きたまへるほど(ただ溜息を吐きなさるのが)、忍びやかに(しとやかで)、うつくしくいとなつかしきに(好ましくとても親しみがあつたので)、なほえ忍ぶまじく(中將はさらに進んで)、

「*御服も(大宮を悼んでの喪服も)、この月には脱がせたまふべきを(今月にはお脱ぎになるわけですが)、日ついでなむ吉ろしからざりける(月末は暦の縁起が良くなっていませんでした)。十三日に(この十三日に)、*河原へ出でさせたまふべきよしのたまはせつ(忌明けの禊ぎの為に、河原の下賀茂神社にお出掛け下さいますようにとの殿の御話でした)。なにがしも御供にさぶらふべくなむ思ひたまふる(私も御供仕ろうと存じます)」 *「おんぶく」については、注に<父方の祖母の服喪は五か月。大宮の薨去の三月二十日から五か月経たことになる。>とある。この記事で今が八月と知れる。 *「かはら」は<京都の鴨川の河原。特に、四条河原。>と大辞泉にある。が、四条河原が町民文化で賑わったのは江戸時代で、此处での文意は御祓いだろうから賀茂社で、河原町に近い下賀茂神社かと思う。

と聞こえたまへば(と申しなさると)、

「たぐひたまはむもことことしきやうにやはべらむ(ご一緒下さると事が仰々しくは御座いませんか)。忍びやかにてこそよくはべらめ(人目に立たないようにするのが良いと存じます)」

とのたまふ(と姫は仰います)。*この御服なんどの詳しきさまを(自分がなぜ大宮の喪に服しているのかと言う詳しい事情を)、人にあまねく知らせじとおもむけたまへるけしき(世間に広く知らせてはいけないとお考えのような姫の両大臣への気配りが)、いと労あり(とても行き届いています)。*「この」は<姫が大宮の喪に服していること←姫が内大臣の娘であり大宮の孫であること>という事情であり、その事情は<『集成』は「玉鬘の素姓は、今しばらく秘密にしようというのが、源氏と内大臣の約束でもあった」と注す。>と注にある。

中将も、「漏らさじと(事情を洩らさないようにと)、つつませたまふらむこそ(あなたが祖母との血縁を隠そうと為さることこそ)、心憂けれ(悲しく思えます)。忍びがたく思ひたまへらるる形見なれば(その死が残念でならない祖母を偲ぶ拠り所なので)、脱ぎ捨てはべらむことも(私はこの喪服を脱いでしまうことさえ)、いとも憂くはべるものを(とても物寂しい気が致しますものを)。さても(それにしても、こうして実の姉弟ではなかったと知れても)、あやしうもて離れぬことの(大宮の孫同士ではあるという、奇妙に近い間柄であるというあなたと私の縁は)、また*心得がたきにこそはべれ(またどういう天の思し召しかと不思議に思います)。この御あらはし衣の色なくは(あなたの着ていらっしゃる、その大宮を偲ぶ気持ちを表す喪服の色が無かったら)、えこそ思ひたまへ分くまじかりけれ(私はこれほどまであなたとの血縁を実感しなかったでしょう)」*「心得がたし」の「こころ」は<自分の思考・理解>ではなく<真理、天の啓示、神の心>であり、それが「得がたい(分からない)」という言い方は<不思議な縁を感じる→神の導きを思う>という意味で、姫と自分の出会いを特別な運命として訴えようという中将の口説き文句だ。

とのたまへば(と仰れば)、

「何ごとも思ひ分かぬ心には(何の分別もつかない私には)、ましてともかくも思ひたまへたどられはべらねど(世の中の巡り合わせの意味など、まして何が如何とも筋道を考え辿ることも出来ませんが)、かかる色こそ(この喪服の青ねずの色合いというものは)、あやしくものあはれなるわざにはべりけれ(殊更に物哀れなものと存じます)」

とて、例よりもしめりたる御けしき(いつにも増してしんみりとした姫の御様子が)、いとらうたげにをかし(とても健気で風情があります)。

[第四段 夕霧、玉鬘と和歌を詠み交す]

かかるついでにとや思ひ寄りけむ(この時とばかりに思っか)、蘭の花のいとおもしろきを持たまへりけるを(蘭の花のとても美しいのを持っていらっしゃっていたのを)、御簾のつまよりさし入れて(中将は御簾の下から差し入れて)、

「これも御覧ずべきゆゑはありけり(この花も私たちの縁をあなたがお知りになるべき色を示しています)」

とて、とみにも許さで持たまへれば(直ぐには枝を放さずお持ちだったが)、*うつたへに思ひ寄らで取りたまふ御袖を(中将の打ったその手に特には気付かずに、花をお取りになった姫の御袖を)、引き動かしたり(中将は引いたのです)。*「うつたへに」は下に打消しを伴ってくあながちに～しない>という意味で使う副詞らしい。また、「うつたへ」はく打って、美しくした「たへ(袴、コウゾで織った白い布、または、白い布)」>と古語辞典にあり、是は恐らく<織物>である姫の「御袖」を引く為に中将がく打った手>という意味の洒落言葉なのだろう。

「同じ野の露にやつるる藤袴、あはれはかけよかことばかりも」(和歌 30-01)

「切って切れない仲だもの、嘘で良いからスキだと言って」(意識 30-01)

*注に<夕霧から玉鬘への贈歌。「あはれはかけよ」と訴える。完訳「藤袴」は、「藤衣」(喪服)の意をひびかすとともに、ゆかりの色(藤-薄紫)の意を表し、縁者同士の交誼をと訴えた」と注す。>とある。「ゆかりの色」が「紫」というのは、古今集 867 番の<読人知らず>の歌「紫のひととゆゑに武蔵野の草は皆がらあはれとぞ見る」に由来する旨の説明は、特に若紫巻などで良く語られていた。が、この引歌は良く分からない。まして、この歌から「紫」が「縁故の色」として広く知られるようになった、というのも分からない。この引き歌に特別な説得力が有るとすれば<読人知らず>などではなく、特別な人が特別な事情で詠んだ歌、でなければならぬように思えてならない。が、不明だ。しかし、私が納得するかどうかなど無関係に、「紫」が「縁故の色」だということは当時の宮廷人に広く認められていたことらしく、それこそが決定的に重要で、私は只そう認識するしかない。「同じ野の」は「武蔵野の」を踏んでいるのだろう。「藤袴=蘭の花」は「紫草」を踏む。「あはれ」の原義は感動・共感・同情などの深い感情。「かこと」は何か事に事寄せて言う<言い訳、口実>で、そうした苦しい立場を嘆く心情から<不平、愚痴、恨み言>を意味することもある。「あはれはかけよ(優しい言葉を掛けてくれ)かことばかりも(嘘でも良いから)」という言い方も、下敷きの「種は皆がらあはれとぞ見る(一族は全て面倒を見る)」を受けていて、その大風呂敷が嘘だったのか、実力不足で果たせなかったのか、そんな背景事情が引歌にあったという認識さえ窺わせる中将の詠み方だ。意識は年増の歌謡曲になってしまったが、中将の歌に 16 歳の若さは感じない。

「*道の果てなる(中将は自分こそが結婚相手だ)」とかや(とでも言うのだろうか)と、いと心づきなくうたてなりぬれど(姫は意外な告白に困惑したが)、見知らぬさまに(さり気無く)、やをら引き入りて(静かに後ずさりして)、*「道の果てなる」は注に<以下、「うたてなりぬれど」まで、玉鬘の心中。引歌「東路の道の果てなる常陸帯のかごとばかりも逢ひ見てしがな」(古今六帖五、帯、三三六〇)による。>とある。引歌の歌筋は「かごとばかりも逢ひ見てしがな(口を吐くのは失恋の愚痴ばかりだが、それでも逢いたくてしょうがない)」という素直な心情のようだ。その「かごと(愚痴、恨み言)」を言う枕に「常陸帯の鉸具(かこ、留め金)」を置く。その「ひたち」のまくらに「あづまぢのみちのはてなる(東国最東端の)」を置く、という言葉遊び。だが、ただの語呂合わせだけではない響きが「あづまぢ(下る→左遷→傷心)」「道の果て(恋の終り)」という語にはある。そして「ひたちおび」はく昔、正月 14 日、常陸国鹿島神社の祭礼で行われた結婚を占う神事。意中の人の名を帯に書いて神前に供え、神主がそれを結び合わせて占った。神功皇后による腹帯の献納が起源とされる。帯占。鹿島の帯。《季 新年》>と大辞泉にある。つまり、破局する運命だった恋、を意味する。という、実に凝った歌、のようだ。で、中将の「かことばかりも」がこの引歌を下敷きにしている、ということを知って「道の果てなる」とかや>と感じた、というのが此処の文意らしい。しかし「道の果て」は、「東路の道の果て(傷心の恋の終り)」と読めば<失恋>だが、「道の果てなる常陸帯(最終的な恋占い)」と読めば<結婚相手>を意味する。そういう二重読み

を当然の教養として備えている当時の宮廷読者向けの語り口は、私のようなものにはとんでもない難文だ。注釈無しには読解の手掛かりも無いし、注釈を理解するだけでも可也手間取る。

「尋ぬるにはるけき野辺の露ならば、薄紫やかことならまし (和歌 30-02)

「誘い文句に事欠いて、縁があるとはをこがまし (意識 30-02)

*注に<玉鬢の返歌。「野」「露」「かこと」の語句を用い、「藤袴」はその色「薄紫」を用いて、「かことならまし」と切り返す。『完訳』は「反実仮想の構文で、実際には二人は無関係で「かごと」は「露」ほども当らぬ、と切り返した歌」と注す。「武蔵野は袖ひつばかりわけしかど若紫は尋ねわびにき」(後撰集雑二、一一七七、読人しらず)を踏まえる。>とある。下敷き歌の「ひつ」は<浸る、水に浸かる>で、「袖浸つばかり分けしかど」は<袖が濡れるほど草むらを分け入って探したが>で、相当な女遊びをしたが本命は居なかった、ような語感の歌筋だ。また、当歌の「はるけし」は<遠く見渡して全体が分かる、昔が懐かしい>といった語感だが、「尋ぬるにはるけき」は<遠くから声を掛ける→冷やかす>だ。姫は中将に<数多くの女遊びの一人と思って声を掛けたのならお生憎様だけど私はそういう女じゃありません>と実弟のように接してきた可愛い従弟を窘めた、のだろう。

*かやうにて聞こゆるより(こうして姉弟として直答申し上げる以上の)、深きゆゑはいかが(深い縁などは無いと思います)」 *「かやうにて」は<こういう様で、こういう状態・形態で>という言い方だから、これは歌の添え句では無しに、実際に今二人が直に親しく話している姉弟のような間柄、を指しているのだろう。つまり、そういう姉弟の関係「より」「深きゆゑ(深い関係)」の恋人同士には「いかが(あらむ、如何して成れましょうか)」、という打消しで中将の申し出をお断りする言い方だ。

とのたまへば(と仰れば)、すこしうち笑ひて(中将は少し噴き出して)、

「浅きも深きも(私の思いが浅いか深いかを)、思し分く*方ははべり*なむと思ひたまふる(お分かり頂ける点はあるものと存じます)。*まめやかには(公職にある身の建前としては)、いとかたじけなき筋を思ひ知りながら(あなたが尚侍として畏れ多くも帝に御仕えする運びである事を存じていながら)、えしづめはべらぬ心のうちを(それでも鎮められない思いのほどを)、*いかでかしろしめさるべき(どうしてもあなたにお知り頂きたいのです)。なかなか思し疎まむがわびしさに(かえって疎まれてしまうのがつらいので)、いみじく籠めはべるを(ずっと抑えてまいりましたが)、*今はた同じと(元良親王が帝妃との密通を恐れずお詠みになった「どうせなら」に)、思ひたまへわびてなむ(共感して同罪を犯しました)。 *「かた」は<点、箇所、要点、要素、面、部分>かと思う。その「要点」の説明が、「まめやかに」以降で語られるのだろう。 *「なむ」は強調の係助詞で、述語の活用を連体形で結ぶ文型を取る言い方、とある。此处での結びは、「たまふる」という謙譲の補助動詞「たまふ」の連体形となっていて、「～なむと思ひたまふる」で<～であるものと存じます>という文型。 *「まめやか」は<正式に>。参議中将は朝廷の要職であり、近衛は帝の側近衛士だ。かくも帝に忠誠を誓う自分が、帝に仕えようという人に取って恋情を訴えるのは、浅い心情である訳が無い。とでも言いたそうな中将の理屈だが、自分勝手な理屈で、傍目には<お前の自尊心など知ったことか>と思える上流意識であり、地方育ちの姫には通用しない気取った物言いに見える。が、中将にしても是は冗談で、本気で相手を説得する言い方ではないのだろう。 *「いかで」の文は骨格で見れば「いかで知らるべき(とぞ思ふ)」で、「知らるべき」が<知るようになるのが良い→知って貰いたい>だから、全体で<どうにかして知って貰いたい(ものだと思ふ)>という言い方、かと思う。 *「今はた同じ」は注に<引歌「わ

びぬれば今はた同じ難波なるみをつくしても逢はむとぞ思ふ」(後撰集恋五、九六〇、元良親王)。>とある。この引歌は湊標巻の住之江での明石君との回り逢いというか擦れ違いの名場面に表題に繋がる歌として光君にその一端を呟かせていた。元良親王の「今はた同じ(名には成る)」は、宇多天皇の寵妃との密通が露見してくどうせ浮名が立つのなら>と開き直る言い方で、「身を尽くしても逢はむとぞ思ふ(殺されても良いから逢いたい)」という言い方で浮気相手に未練を示して贈った歌のようで、とはいえ、「難波なる湊標ても」などという絶妙な洒落込みを使っている事から、その実<遊びは終り>ということを告げているはいるのだろう。で、この歌を源氏殿は正にその浪速津で「身を尽くしても(何としてでも、明石君に逢いたい)」という風情で言っていたが、此处での中将の「今はた同じ」は浪速津という場所では無く、帝の妃への横恋慕という引歌本来の事情に重ねた言い方で、だから「わびてなむ」が落ちになる。「侘ぶ」には<嘆く、困る、謝る>という意味はあるが、<打ち明ける、告白する>という意味は無く、強いて言えば犯罪を<白状する>という語感であり、それが<恋情を吐露する>という意味になるのは、元良親王の歌を引いてこそ成立する言い方だ。だから、そこまで補語する。そうすると、是が大袈裟な言い方の冗談だということが良く分かる。何度も言うが、当時の宮廷人の常識や世相を反映した語り口は、私のような者にとっては難文だ。しかし、およその記事や文献が時の常識や世相を反映するのは、言葉の社会性からして自明だ。だから面白い、と素直に言えるほどこの読解は楽しくはないが、相当な時間ツブシにはなっている。

頭中将のけしきは御覧じ*知りきや(頭中将があなたに恋慕していたことはご存知ですよ)。人の上になんど(その従兄の恋情を他人事などと)思ひはべりけむ身にてこそ(思っていました私こそ)、いと*をこがましく(その思い遣りの無さが、何と愚かしく)、かつは*思ひたまへ知られけれ(そして今やこれほどのあなたへの恋慕を思い知らされているのです)。なかなか(今では)、かの君は思ひさまして(彼は熱情も冷まして)、つひに(要するに)、御あたり離るまじき*頼みに(あなたとは切っても切れない腹違いの姉弟血縁だということ)、思ひ慰めたるけしきなど見はべるも(納得しているらしい様子などを見ますと)、いとうらやましくねたきに(彼がとても良い立場に見えて変わってほしい気になるので)、あはれとだに思しおけよ(この逆転した私の惨めな立場に同情してくださいな) *「知りきや」の「き」は過去を示す助動詞、「や」は疑問符。ただ、此处では余りにも明白なその事実を<知っていましたか>と言うよりは、<(かつて~であったことを)知っていますよね>という念押し of 言い方だろう。 *「をこがまし」は<さしでがましい、出過ぎている>という言い方が多いようだが、原意は<配慮が足りない←愚かしい>だから、此处では中将の従兄への思い遣りの無さ、言伝の遣いなどで協力せずに傍観していたことへの反省の弁、かと思われ、従って自分も従兄に協力を期待できない情けなさを表明しているのだろう。 *「思ひたまへ」の「たまふ」は単に聞き手に対する丁寧な言い方ということではなく、聞き手に対する「思ふ」の謙譲表現であり、それは即ち中将の姫への恋慕、なのだろう。 *「頼み」は<拠り所>。此处では具体的に<血縁>を意味する。

など(などと)、*こまかに聞こえ知らせたまふこと多かれど(理屈立てて説明申し上げることが多かったが)、*かたはらいたければ書かぬなり(後は他愛無いことなので書きません)。 *「こまかに」は<こまごまと>で、その「こまごま」は<細部にわたって詳しく>という場合や<親身になって行き届いて>ということもあるが、此处では入り組んだ話題でも無いし、姫に相談を持ち掛けられたわけでもなく、中将が一方的に<くどくどしい言い方で言い寄った>のであり、「知らせたまふ(お知り頂く←説明する)」事柄であれば恐らく<理屈っぽい>言い方だったのだろう。 *「かたはらいたし」は<見苦しい、不都合だ、笑止である>と古語辞典にある。此处でも、これ以上の醜態は中将の名誉にとって不都合だ、とか、失言もあったかも知れない、とかを想像することは出来るが、実はそんなことはこの文章の何処にも書いて無い。この場面描写にあるのは、下心が有るには在るが、中将はむしろ姉弟であれば言いようも無かった男女としての会話を姫に言い寄ってみて、より親しく接

したかった、というのが実相に近い。思い詰めた気持ちではないからこそ、直ぐに冗談口調で打ち解けた。しかし、姫のほうは少しその戯れに乗りかけたものの、中将よりはるかに重い屈折した事情を抱えているので、とても乗り切れない。それが下文に示されるようだ。ともあれ、この「傍痛し」はその戯れが<他愛無い>ので「書かぬなり」と言い切っているのだろう。省筆の弁としてもここまで言い切るのは珍しい。

*尚侍の君(尚侍を受諾なされた姫が)、やうやう引き入りつつ(次第に奥へ引き入りながら)、*むつかしと思したれば(対面を終えたいとお思いだったので)、*「尚侍の君」という言い方は、注にく既に尚侍に就任したことを示す。>とある。中将はその諾否の確認に殿から使者を仰せ付かって来た筈なので、「御返りおほどかなる」が受諾の返事だったのだろう。が、実態としては、姫は出仕を拒否は出来ないで、喪明けに出仕する準備は出来ているか、という「確認」だったかとは思ふ。なお、「尚侍の君」の読みは「かんのきみ」とあり、原文の仮名表記の「かんのきみ」を漢字表記で「尚侍の君」としたもののようで、「尚侍の君」は<くないしのかんのきみ>が正しい読み方に違いない。*「むつかし」は<不快である、煩わしい、恐ろしい>などと古語辞典にあるが、此処では具体的にこの対面の続行が<難しい・困難だ→終えたい>ということかと思ふ。少なくとも、姫が中将の打明けを真に受けて悩むとか困惑するという語り口では無い。中将が冗談半分なのは姫自身にこそ明らかだ。いや、だからこそ姫は落ち込んだ。中将に悪気は無いだろう。以前と変わらぬ親しさで、しかし以前とは違う間柄として、他人だからこそ成立する戯れを楽しもうとした。しかし、それは同時に姫と殿が、既に他人だからこそ成立する戯れを楽しんでいる、ことをも明示しており、それを中将は知っての上でからかうようなことを姫に言う、という意味合いの構図になってしまう。それでも平気で興に乗じるほどの図太さは姫には無い。だから奥ゆかしく、其処が魅力だ。が、姫はもう耐えられない。

「心憂き御けしきかな(つれない素振りを為さいますね)。過ちすまじき心のほどは(私が間違いなど起こさない性格だとは)、おのづから御覧じ知らるるやうもはべらむものを(自然とお分かり頂けるものと存じますが)」

とて、かかるついでに(中将はこの際にと)、今すこし*漏らさまほしけれど(もう少し親しく話したかったが)、*「もらす」は<水や涙などの液体が少し出る>という語感で、通常は表面上に現れない内面が少し見える、という言い方に通じて<秘密が漏れる、本心を洩らす>などとも言う。また、溶媒体としての液体という概念から、心を通わす、恋情を打明ける、なども意味する。ただ、中将は本気では無いので<恋情を打明ける>というよりは<親しく話す>ことを欲したのだろう。

「あやしくなやましくなむ(ちょっと気分が悪くて)」

とて、入り果てたまひぬれば(姫は奥の部屋に入っしまいなされたので)、いといたくうち嘆きて立ちたまひぬ(中将は深い溜息をついて立ち去りました)。

[第五段 夕霧、源氏に復命]

「*なかなかもうち出でてけるかな(変な事を言ってしまったものだな)」と、口惜しきにつけても(姫との対面で言い寄ったことが悔やまれるに付けても)、*かの(どうせなら、あの)、今すこし身にしみておぼえし御けはひを(もっと深く印象に残った春の御方の御様子を)、かばかりの物越しにても(少し離れた物陰からにしても)、「ほのかに御声をだに(ほんの微かな御声だけでも)、いかならむついでにか聞かむ(どんな折に聞けることか)」と、やすからず思ひつつ(心穏

やかならず考えながら)、御前に参りたまへれば(中將が春の御殿の正殿に参上なさると)、出でたまひて(殿が奥から出ていらしたので)、御返りなど聞こえたまふ(中將は殿に姫のお返事などを報告なさいます)。*「なかなか」は<中途半端>とあり、なるほど中將は姫に本気とも冗談ともつかない中途半端な言い方をした。というか、中將は姫の人となりに当たりを付けたい、といったところで、いろいろな言い方や聞き方をして出来るだけ姫の反応を見たかったに違いない。あわよくば本気の恋に落ちたい、という気はあったかも知れないが、少なくとも今の時点では興味と好意以上のものでは無いだろう。しかし、それなりに気のある事は示したので、姫が自分を如何思うかは相当に気に成るところだし、如何思われても仕方が無いという事から言えば、何時に無く<変な事を言ってしまった>と中將が思うのは当然だ。*「かの今すこし」は注に<以下自然と地の文が夕霧の心中文となっていく。「野分」巻(第一章二段)の紫の上の垣間見をさす。>とある。

「この宮仕へを(尚侍での出仕を)、*しづげにこそ思ひたまへれ(姫が気が進まないものとお思いだとは)。*宮などの(兵部卿宮などの)、練じたまへる人にて(恋に手馴れた人で)、いと心深きあはれを尽くし(とても教養高く真心を示して)、言ひ悩ましたまふになむ(口説き為さる方のお手紙に)、心やしみたまふらむと思ふになむ(心を感じ入らせていらっしゃると思えば)、心苦しき(こうした宮仕えのお勧めは私としても、本意では無い)。*「しづげ」は辞書に見当たらない語だが、「渋い気配(物事が順調に進まない状態)」のことだろう。「こそ思ひたまへ」の主語こそ姫に違いないが、「れ」は事態を客観視する助動詞「り」の已然形で、下に観察者である話者の評価・感想があるべき文意の、その評価文が省略される係り結びの文型で、その事態の意外性による観察者の喜怒哀楽の感慨深さを敢えて明示しないで余韻を残す言い方、かと思う。此处での殿の感慨は恐らく<残念だ>で、「心苦しき(私も本意では無い)」に繋がるのだろう。*「宮」は蛸兵部卿宮。「練じ」は、手慣れている、意。と注にある。

されど(しかし)、大原野の行幸に(暮れの大原野での鷹狩りの折に)、主上を見たてまつりたまひては(姫は帝を拝し申し上げ為さってからは)、いとめでたくおはしけり(帝はとても立派でいらっしゃった)、と思ひたまへりき(と姫はお思いだったのです)。若き人は(若い人は)、ほのかにも見たてまつりて(少しでも帝を拝し上げたら)、えしも宮仕への筋もて離れじ(宮仕えの願いを思わずに居られるものではない)。さ思ひてなむ(そう思ったので)、このこともかくものせし(このように取り計らったのだ)」

などのたまへば(などと殿が仰ると)、

「さて(それにしても)、*人ごまは(尚侍君の続柄は)、いづ方につけてかは(どの方の縁故に)、たぐひてもものしたまふらむ(属しなさるのでしょう)。中宮(御所では中宮が)、かく並びなき筋にておはしまし(后として公的な正室でいらっしゃるし)、また、弘徽殿(こうきでん、女御が)、やむごとなく(最上の家柄で)、おぼえことにてものしたまへば(主上の御寵愛も格別でいらっしゃれば)、いみじき御思ひありとも(主上が君を特に気に入りなさっても)、立ち並びたまふこと(御二人と肩を並べなさるのは)、かたくこそはべらめ(まず出来ますまい)。*「ひとごま」は<人柄、性格、見映え、立場、人となり>などと多様な意味を取り得るので、文意からその場面に応じた中身を探るしか無い。此处では「いづ方につけて(どの家系・一族に)」「たぐふ(類ふ、属する)」かが話題なので、家柄または其れとの続柄、が問題なわけだ。誰に嫁ぐかは大問題だが、何処の家のどういう序列の娘として嫁ぐのかも、子育てが母方の管理下と成る母系身分社会に於いては、母の家格で子供が育つことに成り、やがて母親はその子供の出世によって身分と生計の安定を得るので、出身の家格と続柄は女の人生に決定的な要素なのだ。

宮は(兵部卿宮は)、いとねむごろに思したなるを(君をととても慕わしくお思いでしたので)、わざと(はっきりと)、*さる筋の御宮仕へにもあらぬものから(女御としての後宮入りではないとしても)、ひき違へたらむさまに御心おきたまはむも(帝に対しては親王は分が悪いので、話が違うように御気を悪く為さるのも)、*さる御仲らひにては(御兄弟仲としては)、いといとほしくなむ聞きたまふる(とても具合が悪いのかと存じます)」「*「さる筋」は注に<女御としての入内をさす。そうではない尚侍としての出仕とはいえ、の意。>とある。 *「さる御仲らひ」は注に<親しい兄弟の仲としては。>とある。何せ、殿も宮も、そして帝も兄弟だ。

と、おとなおとなしく申したまふ(中将は大人びて応えなさいます)。

[第六段 源氏の考え方]

「かたしや(難しいものだ)。わが心ひとつなる人の上にもあらぬを(尚侍君の人生は私一人で決められる事柄では無いものを)、大将さへ(だいしゃうさへ、右大将まで君が出仕なさるのは話が違うと)、我をこそ恨むなれ(この私を恨んでいるようだ)。

すべて(そうした不都合は全て)、*かかることの心苦しさを見過ぐさで(こうして身寄りを無くしていらした君が気の毒なのを見過ごさずに)、あやなき人の恨み負ふ(事情を知らない人から恨みを買うという)、かへりては軽々しき*わざなりけり(かえって思慮の足りない私の至らなさのせいであった)。かの母君の(君の母君が)、あはれに*言ひおきしことの忘れざりしかば(幼子を心残りとして遺言してあったのを忘れていなかった)、心細き山里になど聞きしを(出会えた時に、田舎暮らしをしていたなどと聞いたが)、*かの大臣(内大臣の方では)、はた(もしかすると)、聞き入れたまふべくもあらずと愁へしに(娘との申し立てをお聞き入れ下さらないかも知れないと案じてたので)、いとほしくて(同情して)、かく*渡しはじめたるなり(こうして援助し始めたのです)。ここにかく*ものめかすとて(私がこうして君を大事にすることで)、かの大臣も*人めかいたまふなめり(あの大臣も君を娘として認めていらっしゃるようです)」「*「かかること」は注に<『集成』は「「かかること」は玉鬘が父に知られず零落していたことをさす」。『完訳』は「玉鬘の実父に顧みられぬ不幸」と注す。>とある。何処までを如何とはっきり言わない言い方が「かかること」なので、具体的な内容は確かめようもないが、ともかくも善人よろしく「見過ぐさで」世話をしたのだから、見過ごせなかった事情、を言っているのは確かだ。 *「わざ」には<事の次第、経緯>の意味があつて、それは即ち事情・理由説明であり<～のせい>という言い方。 *「言ひおきし」は注に<夕顔が遺言したという。これは作り事である。>とある。夕顔は突然のショック死だった。遺言はおろか、一言も辞世の言葉を発していない。 *「かの大臣はた聞き入れたまふべくもあらず」は注に<内大臣が顧みてくれない、と泣きついてきたために。「愁へ」の主語は玉鬘。これも作り事。>とある。確かに、源氏殿に都合の良い言い方ではあるだろうが、「はた～あらず」はくもしかすると～では無いかも知れない>だから、藤原殿の家庭事情に拠っては支障無く迎え入れられたかどうかは分からない、という見方も有り得る事を思えば、藤原殿にしても完全には否定しきれない小賢しい上手い言い回し、とも言えそう。 *この「渡す」は<移動する>ではなく<物資を渡す→援助する>という意味だろう。 *「ものめかす」は<ものものしくする→大事にする>。 *「人めかす」は<一人前と認める>。

と、つきづきしくのたまひなす(尤もらしく言い繕いなさいます)。

「人柄は(君の人柄は)、宮の御人にていとよかるべし(兵部卿宮の夫人としてとても相応しかるものだ)。今めかしく(古風ではなく)、いとなまめきたるさまして(とても快活で)、さすがにかしこく(それでいて賢く)、*過ちすまじくなどして(多情な性格でも無いので)、あはひはめやすからむ(夫婦仲は穏やかに進むだろう)。さてまた(また一方で)、宮仕へにも(宮仕えに於いても)、いとよく足らひたらむかし(君は十分な資質を備えているようだ)。容貌よく(美人で)、らうらうじきものの(可愛らしいが)、公事などにも*おぼめかしからず(事務処理に不慣れでもなく)、はかばかしくて(手際が良くて)、主上の常に願はせたまふ御心には(帝がいつも望んでいらっしゃる尚侍へのご期待に)、違ふまじ(背くことは無いだろう)」 *「あやまち」は<間違い、失敗>という一般的な意味にもなるが、此处での話題は夫婦間の問題だから<奔放な性行動>を言うのだろう。 *「おぼめく」は<覚束無げに成る、ぼやぼやする、不審に思う、とぼける>などとある。物事に不慣れ・不案内で狼狽する、またはその振りをする、ということらしい。

などのたまふけしきの見まほしければ(などとも仰る殿の真意を中將は知りたくて)、

「年ごろかくて育みきこえたまひける御心ざしを(年来このように殿が君をお育て申しいらっしゃった御温情を)、*ひがざまにこそ人は申すなれ(最初から娘ではなく女として世話していらしたかの、歪めた見方で以って人は噂しているようです)。かの大臣も(内大臣も)、さやうになむおもむけて(そうした見方を示して)、大將の(右大將が)、あなたさまのたよりにけしきばみたりけるにも(内大臣家に親子の血縁を頼って尚侍君との結婚を申し込んだ時にも)、*応へける(殿が養父の立場なら実父たる自分の親権の方が強いだろうが、殿が主人として尚侍君を実効支配していらっしゃるの、自分の意向では事が運べない旨を、応えました)」 *「ひがざま」は<歪んだ姿勢>という語感。訳文にある<変なふう>は含みのある上手い言い換えだが、「こそ」を<~で以って>と強調したいのと、「僻み」の<歪み感>も示したいので<歪めた見方>とする。また、その内容も補語する。 *「いらへける」の主語は内大臣だ。が、敬語表現では無い。太政大臣たる父に対して、内大臣の非難めいた言動を報告しているから敬語を控えたのだろうか。しかし、内大臣は中將の母方の伯父であり、高官の上司だ。身内意識の親しさや、厳然とした階級差や、話者と聞き手、また話題の対象者との関係などで使い分けるかの敬語や謙讓語の表現は、何だか良く分からない。なお、長文の補語を加えたが、文意を得るには必要だと思うからで、しかし言葉を増やすほど誤訳の恐れも増すので好ましくは無く、何とも気乗りしない相当な難文だ。

と聞こえたまへば(と申しなさると)、うち笑ひて(殿は軽く笑って)、

「かたがたいと似げなきことかな(そうした事々は実情に全く適合しないものだ)。なほ(何より)、宮仕へをも(宮仕えにしても)、*御心許して(実父たる内大臣が御納得なさって)、かくなむと思されむさまにぞ従ふべき(こうとお決めなさった通りに従うべきです)。*女は三つに従ふものにこそあなれど(女に三従の義あり、その第一が親への服従であってみれば)、*ついでを違へて(順序を間違えて)、*おのが心にまかせむことは(私の考えに従うことは)、あるまじきことなり(あってはならないことだ)」 *「みこころゆるして」は注に<『完訳』は「実の父親が得心なさって、こうとお考えになるご意向に従わねばなるまい」と注す。>とある。仰々しい言い方で、ほとんど内大臣をからかっているかのような印象だ。 *「女は三つに従ふもの」は注に<『集成』は「婦人に三従の義あり。専用の道無し。故に未だ嫁せざれば父に従ひ、既に嫁しては夫に従ひ、夫死しては子に従ふ」(『儀礼』喪服伝)」。『完訳』は「女の三従の徳。未婚女性の父親に従うべき徳目で、論旨を強調」と注す。>とある。「専用の道」とは<自分本位の生

き方>のことだろうか。「自分本位」が<自分勝手>ではなく<自身の言動に社会的責任を持つ・果たす>だとしたら、女とか男に関係なく、ほとんどの人に「専用の道」は無いだろう。 *「ついで」は<順序>。 *「おの」は尚侍君自身ではなく、話者である殿の自称。

とのたまふ(と仰います)。

[第七段 玉鬘の出仕を十月と決定]

「*うちうちにも(六条院の内情では)、やむごとなきこれかれ(高貴な方々が此処彼処にそれぞれの領分で)、年ごろを經てもものしたまへば(数年来住んでいらっしゃるので)、えその筋の人数にはものしたまはで(それと同等な形では尚侍君が部屋を構え為されずに)、*捨てがてらにかく譲りつけ(一度邸を出す意味で内大臣に君の出自を打ち明けて親権を譲って)、*おほぞうの宮仕への筋に(おぎなりの宮仕えで、混み入った下世話事情を超越する藤原姫の出仕という筋書きの体裁を整えた上で)、*領ぜむと思しおきつる(改めて君の身柄を引き受けようと殿が計画していらっしゃるといのは)、いとかしこくかどあることなりとなむ(とても周到で抜け目無いことだと)、よろこび*申されけると(お祝い申さずには居られないものと)、*たしかに人の語り申しはべりしなり(はつきり内大臣が筋立てて申しておりました)」 *「うちうちに」は<内心では>という言い方らしいが、此処では「ものしたまふ(居を構えていらっしゃる)」を条件付ける言い方なので<(六条院の)内々の事情として>という意味だろう。ともかく、この「うちうちに」から「よろこび申されける」までが「人の語り申しはべりしなり」とある。「人」とは、尚侍君の親権を「譲りつけ」られた<内大臣>に他ならない。 *「捨つ」は<放り出す>だが、その具体的な内容は尚侍君が六条院を出ること、ないし源氏殿の娘としてではなく藤原殿の娘として公務に就くことで、その出自が公然と成ること、ただし公言するかどうかは別問題、だ。是を源氏殿の計略の内と読んだ藤原殿が、それにまんまと乗せられてしまう自分の悔しい立場から、娘への哀れみと源氏殿の狡猾さを吐き捨てるように言った言い方が「捨つ」だ。 *「おほぞう」は<大雑把、通り一遍、型通り、おぎなり>。 *「りやうず」は<手に入れる、支配する>。「思ひ掬つ」は<予定する、計画する>。 *「申され」の「れ」は自発・受身の助動詞「る」の連用形で<申さずには居られない>。今でも使う皮肉っぽい言い方。 *「たしかに」は<はっきりと、直に>で、伝聞で無しに直接自分が聞いたという意味。「語る」は<筋のある物語を話す>。この会話文の口調は、殿の悪口を言っている内大臣の様子を、中將が殿に言い付けて居るような形だが、この複雑な内容を簡潔に言い表す話しっぷりから、中將が同様の認識を持って、その確認をしたがっている事は明白だ。同時に、内大臣の鋭さは、源氏殿のことを良く知っているとは言え、それを中將に話すという計算高さも含めて優秀だ。尤も、内大臣は直接に帝と話が出来る立場なので、帝が太政大臣から尚侍の件をどういう言い方で進言されているのかを聞き出せるわけで、それは恐らく中宮や女御の手前があるので自重してくれといった筋だったのだろうし、他の情報網からの話を総合すれば、是が自然と導かれた結論だったのかも知れない。

と(と中將が)、いとうるはしきさまに語り申したまへば(とても改まった態度で語り申しなさると)、「げに(確かに内大臣は)、さは思ひたまふらむかし(そうはお思いなさるのだろう)」と思すに(と御思いになって)、*いとほしくて(殿は内大臣との関係悪化に危惧を覚え)、 *「いとほし」は<災いを危惧する>。それが他者の「災いを危惧する」場合は<心配する、同情する>などの意味となり、その「同情」が深いと<気の毒に思う>。

「いと*まがまがしき筋にも思ひ寄りたまひけるかな(ずいぶんと疑い深い筋の話を考え付きな
さったものだ)。いたり深き*御心ならひならむかし(娘が心配でならない親心ならではのもの
なのだろう)。今おのづから(今に自然と)、いづ方につけても(どちらにしても)、あらはなるこ
とありなむ(はっきりとすることだろう)。思ひ隈なしや(隠し事など無いのに)」 *「まがまがし」
は<縁起の悪い、不吉な>とある。だから、「まがまがしき筋」は<不吉な話>に見えるが、「不吉」を言葉にすること
自体が忌まわしいし、それでは源氏殿自身が<不吉な存在>になり兼ねない言い方になってしまうので、もっと
一般的に<あらゆる悪い事態まで想定する疑い深さ>を言っていることにした方が穏やかだ。 *「こころならひ」
は<心の習性→身に付けた考え方>で、此处では<親ならでの考え方>。

と笑ひたまふ(と笑いなさいます)。御けしきはけぎやかなれど(内大臣の推量を打消す殿の御
態度はきっぱりしているが)、なほ(それでも)、疑ひは置かる(中将は疑いを残します)。

大臣も(殿自身も)、「さりや(そうか)。かく人の推し量る(このように藤原殿が考える)、案に
落つることもあらましかば(通りに私が動いてしまっていたら)、いと口惜しく*ねぢけたらまし
(どれほど悔しく不恰好なことだろう)。かの大臣に(内大臣に)、いかで(どうにかして)、かく心
清きさまを知らせたてまつらむ(この身の潔白をお知らせ申し致したい)」 *「ねぢく」は<曲がる、
ねじれる>で、「曲がる」には物を曲げる他に、思いを曲げるの意味がある。「ねぢけたり」は<ひねくれている>
でもあるが、此处では<不本意だ→意固地になる→偏屈になる→不恰好だ>と読みたい。

と思すにぞ(と御思いになるに付けても)、「げに(確かに)、宮仕への筋にて(畏れ多く穢れな
き神職の宮仕への筋で事を運んで、禊ぎよろしく過去を洗い流して)、けぎやかなるまじく紛れ
たる*おぼえを(不都合が表ざたにならないように誤魔化した思惑を)、かしこくも思ひ寄りたま
ひけるかな(内大臣はよくも見抜きなされたものだ)」と、*むくつけく思さる(厭な胸騒ぎを覚え
なりました)。 *「おぼえ」は渋谷訳文では、殿の君への<懸想(恋慕)>としてある。しかし、「おぼえ」の語
感は<心当たり>であり、自分の恋心を<心当たり>とは言わないのではないか。それに、源氏殿が紛らせたかっ
たのは、単に尚侍君への思いというよりは全体の不都合な経緯のように見えるので、この「心当たり」はそういう<
思惑>かと思う。 *「むくつけし」は<いやだ、気味が悪い、おそろしい>と古語辞典にある。現代語の「むかつく」
は<気に障る、勘に障る>という語感だが、胸がムカムカして交感神経が働く興奮状態は共通しているのだろう。

*かくて御服など脱ぎたまひて(こうして八月末に尚侍の君は御喪服を脱ぎなさって、出仕の準
備をなされたが)、 *「かくて」は前に、八月十三日に忌明けのお祓いをするという話があった。

「*月立たば(来月は)、なほ参りたまはむこと忌あるべし(まだ出仕なさるには暦の縁起に障り
があります)。十月ばかりに(十月ごろが良いでしょう)」 *「月立たば」は注に<源氏の詞。現在八月。
来月は季の末で結婚を忌む風習があった。『集成』は「尚侍は一般職であるが、帝寵を受けることがあるので、こ
ういう」と注す。>とある。秋の内は待機して、冬になってから出仕するらしい。

と思しのたまふを(と殿がお考えになり仰るのを)、内裏にも心もとなく聞こし召し(帝も待ち
遠しくお聞きあそばし)、聞こえたまふ人びとは(求婚なさっていた方々は)、誰も誰も(皆が皆)、
いと口惜しくて(とても残念で)、この御参りの先にと(この御出仕の前に何とかしたいと考えて)、

心寄せのよすがよすがに責めわびたまへど(懇意にしている女房たちの伝手づてに取次ぎを迫って泣きつきなざるが)、

「*吉野の滝を堰かむよりも難きことなれば(手紙を取り次ぐのは芳野の滝を止めるより難しいので)、いとわりなし(出来ません)」 *「吉野の滝」は注に<「手を障(さ)へて吉野の滝は堰(せ)きつとも人の心をいかが頼まむ」(古今六帖四-二二三三 凡河内躬恒)>が出典参照とある。この歌は詞書に「女をはなれてよめる」とあるようなので、女への未練を歌ったものなのだろう。「たのむ」は「頼む(女への伝手を頼む→手紙を出す)」と「手飲む(水を手ですくって飲む)」の掛詞。歌筋は「喩え川を手で遮って吉野の滝を止めるように思い切って芳野の女と別れたとしても思わず川の水を手ですくって飲むように女に手紙を書かずには居られない」だろうか。この逆説なら、いくら手紙を寄越しても、それを取り次ぐのは滝を止めるより難しい、という言い方になる。

と、おのおの応ふ(それぞれの女房は答えます)。

中将も、なかなかなることをうち出でて(中途半端なことを口にして)、「いかに思すらむ(君は如何にお思いだろうか)」と苦しきままに(不安な思いを紛らす為に)、駆けりありきて(忙しく立ち働いて)、いとねむごろに(とても細かい気遣いで)、おほかたの御後見を思ひあつかひたるさまにて(君の出仕準備の雑用を気に掛けて始末する役回りで)、追従しありきたまふ(ご機嫌を取っていらっしゃいます)。たはやすく(何気なく)、軽らかにうち出でては聞こえかかりたまはず(気軽に話し掛け申し上げる事は為さらず)、めやすくもてしづめたまへり(人目を気にして神妙にいらっしゃいました)。